世界との連携より強く

中越大震災から10月23日で丸5年が経過する。災害が過去のものになるには10年が必要といわれるが、その意味では折り返し点を迎えたことになる。この節目の年に、防災、安全、復興をテーマとした国際シンポジウムが、16日から3日間、長岡市で開かれる。国内外の被災者から専門家、研究者までが一堂に会し、情報共有とネットワークづくりを図るシンポジウムについて紹介する。

16～18日 長岡

中越大震災5年　国際シンポジウム

防災への取り組み共有

◇開催の大きな意義

国際シンポジウムを主催・共催するのは、社団法人中越防災安全推進機構、日本災害復興学会、新潟大学災害復興科学センターの3機関。いずれも中越大震災を契機に誕生した機関で、それぞれの立場から被災地において、復興の支援や災害に関する研究などの活動を展開している。

シンポジウムの開催にあたっては、各機関が協力して、組織委員会（委員長・伊藤滋東京大学名誉教授）と実行委員会（委員長・丸山久一長岡技術科学大学教授）を組織。昨年8月から1年以上にわたって検討を続けてきた。

2004年の中越大震災以降も世界では多くの自然災害が発生した。国内では中越沖地震、平成18年豪雪、能登半島地震、岩手・宮城内陸沖地震、中国・九州北部豪雨ない。

中越大地震5年の節目を迎えるにあたり、1年以上にわたって議論を重ねてきた国際シンポ実行委員会の会議＝09年3月、長岡市市民センター

復興の地域づくり発信

◇持続可能性の獲得

阪神・淡路大震災で被災した神戸市のような都市に比べて、中越大震災の被災地（中山間地）は人口や企業・事業所が少ない。つまり、復興の地域づくりを進めるための担い手が少なく、民間の投資や事業が起こりにくい。また民間の力も働いて比較的短時間で復旧が進み、復興へと移行できる都市に比べて、公的機関の復旧活動に頼らざるを得ない中山間地では、復興に移るまでに時間がかかってしまう。

中山間地では地すべりやがけ崩れなどの地盤災害が広範囲に発生するため、復旧工事の量が多くなることや、安全のために他の地域への避難を余儀なくされることも、復興活動のスタートの遅れにつながる原因だ。

同じ被災地でも都市と中山間地は環境が異なる。そのため中山間地の復興活動は都市に比べて時間がかかるし、復興の手法も都市のそれとは異なってくる。

中山間地の被災地が復興するには、人口減少や高齢化といった被災前からの課題を解決しつつ、将来への持続可能な地域づくりという目標やビジョンの共有化が欠かせない。そしてその目標に向けて、住民の主体的な取り組みや、新たな地域の資源やしくみを生み出していくことが必要になる。

中越大震災の被災地では、多くの集落や地域が中間支援組織のサポートを得ながら、自ら将来像を描き、復興の地域づくりを進めている。もちろんすべてがうまくいっているわけではなく、さまざまな課題に直面しているケースも多い。

中越地域におけるこうした取り組みのプロセスや課題を発表し、復興のあり方や方策を発信することは、世界の国々にとって大いに参考になるはずだ。

復興の地域づくりという点で、阪神・淡路大震災から台湾大地震（集集大地震）、そして中越大震災の被災地がつながり、連携することの意義や効果は見逃せない。神戸で展開された「コミュニティ」を中心としたまちづくりの思想や手法は、台湾大地震の復興に活用され、さらに中越にも受け継がれ、住民主導の復興や持続可能な地域づくりの推進力となっている。

こうした被災地間の連携には交流の場や機会が必要だ。神戸や台湾と中越は相互に行き来し、体験や課題を語りあい、多くを学び合った。今、中越や神戸は四川大震災の復興関係者と相互に行き来し、交流を深めている。

今回のシンポジウムは、こうした国内外の被災地連携を深める交流の場でもある。多彩な参加者の交流の中から、持続可能な中山間地域の復興のあり方など、大きな成果が生まれることを期待したい。

中越大震災で水没した旧山古志村楢木集落。この惨状から復興が始まった＝04年11月3日

減災社会実現目指して

◇中越を活動拠点に

災害体験や研究活動を通じて得られた知識や知恵を共有することで、人間は防災や安全、復興に関する取り組みを進め、より被害の少ない減災社会の実現を目指してきた。今回の国際シンポジウムもそのための一つの場と位置づけられる。

中越の被災地が自らの知見を発表するだけでなく、各被災地の経験や知恵を学び、明日からの復興活動に役立てていく、学術研究の分野も含めて、相互を刺激し、減災社会や持続可能な地域づくりに向けての動きを生み出していく。国際シンポジウムが目指すのは、3日間の交流を契機とした新たな行動の創出であろう。

「中山間地」「持続可能な復興の地域づくり」などをキーワードにしたアジアや世界の減災社会に貢献する情報発信と交流の場。これを5周年という一過性のイベントに終わらせることなく、中越地域を防災、安全、復興の国際的な活動拠点としていくことに期待したい。国際シンポジウムはそのための第一歩だといえるだろう。

国際シンポジウムの詳細や参加方法については中越防災安全推進機構のホームページをご覧いただくか、右記までお問い合わせください。

URL：http://c-bosai-anzen-kikou.jp/sym09/
電話・ファクス　0258(36)8141

2005	パキスタン、インド	地震 パキスタン地震	7万4651人
2006	日本（新潟、秋田他）	豪雨 平成18年豪雪	152人
2006	インドネシア	地震・火山噴火 ジャワ島中部地震	5778人
2006	日本（山陰、北陸他）	豪雨 平成18年7月豪雨	27人
2007	日本（石川他）	地震 能登半島地震	1人
2007	日本（新潟他）	地震 新潟県中越沖地震	15人
2008	ミャンマー	サイクロン サイクロン・ナルギス	13万8373人
2008	中国四川省	地震 四川大地震	8万6633人
2008	日本（岩手、宮城他）	地震 岩手・宮城内陸地震	23人
2008	タイ	洪水	10万人
2008	日本（東海、関東）	豪雨 平成20年8月末豪雨	3人
2009	日本（中国、九州北部）	豪雨 中国・九州北部豪雨	31人
2009	台湾	台風 88水災	698人

シンポジウム開催概要

新潟県中越大震災5周年事業
―― 防災・安全・復興に関する国際シンポジウム ――

日　　程：2009年10月16日（金）～18日（日）
会　　場：新潟県長岡市（ホテルニューオータニ長岡、ハイブ長岡、長岡技術科学大学）
主　　催：（社）中越防災安全推進機構、日本災害復興学会
共　　催：新潟大学災害復興科学センター
特別協力：新潟日報社
協　　賛：新潟県道路整備協会、新潟県河川協会、新潟県治水砂防協会

プログラム

10月16日（金）　会場：ホテルニューオータニ長岡

●ホテルニューオータニ長岡

NCホール	
13：00	開会
13：10	基調講演『災害が問う地方の持続可能性』 伊藤滋（㈳中越防災安全推進機構理事長、東京大学名誉教授）
14：00	パネルディスカッション１『被災を契機とした持続可能な地域づくり』 （パネリスト） 顧　林生（北京清華都市計画設計研究院公共安全研究所長） 陳　亮全（台湾大学教授） 小林郁雄（阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク世話人） 稲垣文彦（中越復興市民会議代表） 森　民夫（長岡市長） （コーディネーター） 室崎益輝（日本災害復興学会会長、関西学院大学教授）
15：50	パネルディスカッション２『その時どう決断したか～災害時の危機管理を考える～』 （パネリスト） ローリー・ジョンソン（プランナー・ニューオリンズ復興総合計画UNOP担当者） ムハマド・ディルハムシャ（インドネシア・シャクワラ大学津波センター） 河田惠昭（関西大学環境都市工学部教授） 山崎　登（ＮＨＫ解説副委員長） 泉田裕彦（新潟県知事） （コーディネーター） 平井邦彦（長岡造形大学教授）
17：30	閉会

10月17日（土）　会場：ハイブ長岡と長岡技術科学大学の２会場

●ハイブ長岡

ハイブ長岡２階　特別会議室	
9：40	開会挨拶　丸山久一（㈳中越防災安全推進機構 理事、長岡技術科学大学教授）
9：50	基調講演〈海外における内陸直下型地震の特徴〉 座長：丸井英明（新潟大学災害復興科学センター防災部門長兼教授） 基調講演『台湾集集地震の被害と特徴』 陳 樹群（中興大學水土保持系教授兼主任）
11：00	セッション１〈中山間地の地震被害の特徴と防災技術〉 座長：塩野計司（長岡工業高専学校教授） 発表１『地震による斜面災害と減災対策』 丸井英明（新潟大学災害復興科学センター防災部門長兼教授） 発表２『地震による宅地地盤被害と防災対策』 大塚 悟（長岡技術科学大学教授） 発表３『パキスタン北部地震による斜面災害』 アラー・バクシュ・カウサル（パキスタン地質調査所イスラマバード副局長）
14：10	セッション２〈都市における水害対策の新展開～最新情報処理技法とその発信～〉 座長：細山田得三（長岡技術科学大学准教授） 発表４『都市域における洪水流と防災に関する新しい考え方』 玉井信行（金沢学院大学大学院教授、東京大学名誉教授） 発表５『ダムや堤防の崩壊による水害シミュレーションの新段階 ～新しい計算法と地理情報システムの結合～』 ムスタファ・アルティナカール（ミシシッピ大学教授）
15：20	セッション３〈雪氷災害の特徴と防災技術〉 座長：和泉 薫（新潟大学災害復興科学センター副センター長） 発表６『実験と数理モデルによる雪崩と土石流の研究』 ペリー・バーテルト（スイス国立雪・雪崩研究所　雪・雪崩研究部門長） 発表７『雪氷災害の変動と予測情報による対策』 佐藤篤司（（独）防災科学技術研究所雪氷防災研究センター長）
16：30	閉会挨拶　丸井英明（新潟大学災害復興科学センター防災部門長兼教授）

●長岡技術科学大学

長岡技術科学大学内　講義室	
13：00	分科会１『火山災害からの復興』 座長：木村拓郎（㈱社会安全研究所所長） 分科会２『都市の復興』 座長：中林一樹（首都大学東京教授） 分科会３『中山間地の復興』 座長：平井邦彦（長岡造形大学教授） 分科会４『中核商店街の復興』 座長：小林郁雄（阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク世話人） 分科会５『被災者支援のあり方』 座長：羽賀友信（長岡市国際交流センター長） 分科会６『行政支援のあり方』 座長：室崎益輝（日本災害復興学会会長、関西学院大学教授）
マルチメディアシステムセンター	
15：00	円卓会議（分科会報告及び意見交換）
セコムホール	
17：00	交流会 ・地元地域おこし団体によるブース出店（地元食材など） ・アトラクション（郷土芸能など）

10月18日（日）エクスカーション（被災地見学会）

（コースA）
9:00 長岡駅出発－長岡市山古志地区、小千谷市方面（中越大震災の被災地）－15:00 長岡駅到着

（コースB）
9:00 長岡駅出発－柏崎市、刈羽村方面（新潟県中越沖地震の被災地）－15:00 長岡駅到着